

金哲彦さん（プロランニングコーチ）

福岡県北九州市出身。八幡大学付属高校（現九州国際大学付属高校）で陸上部に所属。全国大会での活躍はなかったが、当時の早大の中村清監督が高校駅伝の県大会での区間賞を評価した。中村監督の信頼は厚く、早大1年生から4年まで箱根駅伝5区を担当して区間賞2度、84年、85年の総合優勝に大きく貢献した。しかし、卒業後は中村監督の勧めを断ってリクルートに一般入社。小出義雄氏が女子陸上部を創設する以前に、同社陸上部を立ち上げ、独力でオリンピックのマラソン代表を目指した。87年別大マラソンで3位、89年東京国際マラソンで3位。オリンピック代表は逃したものの、その過程で練習拠点にしていた米国コロラド州ボウルダーを紹介し、ボウルダーはその後、日本のマラソンの発信地となった。リクルートランニングクラブのコーチ、監督を経て、02年NPO法人ニッポンランナーズを創設。一般市民ランナーの指導のかたわらマラソンや駅伝の解説者としても親しまれている。

<数の時代が終わって>

私がNPO法人ニッポンランナーズを立ち上げたのは2002年のことで、まだNPO法人という制度ができて間もないころでしたから、大変に驚かれました。会社は「大丈夫か」と心配してくれましたし、当時は実業団の監督をやっていたから、同業の仲間たちには「無理だよ」と忠告されました。走ることは誰でもできる、それにお金を払う人はいないよ、と言われたのを覚えています。私たちの仕事はランニングの指導ですが、いまは後輩たちに任せて、私は主に大会の仕組みづくりなどコンサルタントの仕事が主になりました。

こういう時代ですので、大会にしてもトレーニングにしても、情報はかなりたくさん入ります。ただ、市民ランナーの最大の悩みは自分自身のことが分からないことです。本にはこう書いてあるけれども、自分の練習はこれでいいのか、フォームはこれでいいのだろうか、用具はたくさんあります……端的な例が故障が発生したときにどう向き合うかですから、どうしても個人コーチやクラブでの指導者が必要になります。かなりこじんまりした単位での活動というのが特徴ではないでしょうか。

今は全国どこに行ってもランニング大会のない町はないほど増え、出尽くしたところまで来ていると思います。そうした状況で、隣の町には1万人来たからうちも負けるなど、大会が参加者数を競う時代は終わろうとしています。むしろ、地域性にこだわって、あれもこれもは出来なくとも、小さな特徴や手作り感を大事にして育てる、それが市民ランナーの活動にマッチして大会が活性化し、生き残っていく道ではないでしょうか。

特に地方では少子高齢化が進み、予算もないしで元気が薄れてきています。ランニング大会は走る人だけでなく、ボランティアの力も必要ですから、町に活気が出る。そこで相談を受けることが多いのですが、スポーツを取り巻く仕組みがなかなか難しい。ランニングは道路を使いますから、どうしても地域、自治体との繋がりが大事になります。ハード面で、日本はかなり行き届いています。場所はあるのに、グラウンドや学校の校庭を使いたくとも、色々な規制が入って身動きが出来ない、仏作って魂入れずというケースが多い。スポーツ課や体育課などが運営している場合には、担当者の入れ替わりも少なく、若い人たちの発想が活かされている大会もありますが、やはり大ナタをふるえる政治家の登場を待つしかないでしょう。